

# 拉致×輪姦×レイプ

- ♡喘ぎ、濁点喘ぎ
- カーセックス・玩具
- コックリング・媚薬
- スパンキング・イラマ
- イラマ・拘束
- 乳首クリップ・肉便器宣言

(思ったよりも遅くなっちゃったな)

現在時刻は深夜一步手前。大学の飲み会の帰り道、黒髪の青年—巧(たくみ)は自宅への帰路を急いでいた。

実家から離れた大学に入り、夢の一人暮らしを始めた巧は、誰からも文句を言われることもなく、サークルの飲み会ではしゃぎまわって、気づけばこんな時間だったわけだ。

終電前には帰ったものの、やはり時刻で考えれば遅い時間だ。だが、別に一人暮らしであれば問題ない。明日は昼から大学に出ればいいし、何も問題ない。

帰ってシャワーを浴びて気持ちよく寝よう。

そんなことを考えつつ、最寄駅から自宅までの道を歩いていると、後ろから車の走行音が聞こえてきた。特段気にするものでもない。夜中と言えど、現代社会では普通のことである。

巧がやることと言え、歩道をしっかりと通ること。

しかし、予想に反して車の走行速度はどんどんのろくなっていった。ここは特に店をはじめとする建物はなく、駐車場もない。ではなんだろう。タイヤでもパンクしたのだろうか。

なんて、巧が平和なことを考えながらぼうっと歩いていると、車一黒塗りの大型バンが隣を走り抜けていく。

.....のではなく、止まった。そして扉がいきなり開き、中からぬうっと複数の男の腕が巧みに向かって伸びてきた。

「なんだっ！？んむぐっ！？」

訳の分からぬまま、抵抗もろくにできず巧はバンの中に無理やり連れ込まれてしまう。その拍子にあちこちをぶつけ、痛みがぎゅっと目を瞑るが、慌てて開く。

巧は座席の後ろ側の空きスペースに連れ込まれていた。車の中には四人の男がおり、一人は運転席に座ってハンドルを握っている。残りの三人は巧を取り囲み、ニタニタ下卑た笑みを浮かべていた。

全員大体、三十代くらいの男たちだろうか。

まさか強盗！？目を白黒させつつ暴れようとしていると、みぞおちを一発強めに殴られた。今までの人生で感じたことのないタイプの痛みを目を見開き、わなわな震える。

「っあ、が！？」

「大人しくしろよ、暴れたら今みたいにぶんなぐるから  
なっ！」

ごくごく普通の学生でしかない巧は、一発殴られれば痛み  
と恐怖で途端に大人しくなった。

そのおかげか、男たちはそれ以上殴ってくることはなかった。  
ただし、代わりにと言わんばかりに巧のショルダーバッグを奪い取り、財布を取り出す。しかし、金は抜き取らず、  
取り出したのは匠の学生証だった。

「ふーん、巧君っていうんだ。XX大学の二年生なんだぁ……  
よろしくね♡」

「な、なにが目的なんだ……か、金なんてないぞ！」

訳が分からない。財布から金とはとらないし、いったい何の  
つもりだ？だが、逆らえば暴力を振るわれるし、なにより名  
前をはじめとする個人情報を知られてしまった。

背中にじっとりと嫌な汗をかき、身体ががたがた震える。  
バンの後部は男四人でも動くスペースがあるほど広かった  
が、背後にも男がいるため、後ずさったり逃げたりすることは  
できなかった。

「殺したりしないから安心しろって♡俺たちはただ、おにー  
さんと気持ちいい遊びをシただけなんだからさ」

気持ちいい遊び？絶対にろくでもないに決まっている！巧  
は心の中で叫びながら、身体を震わせることしかできない。

すでに車は走り出している。巧を拉致したときのようなの  
ろのろとした運転ではないだろう。扉を開けて飛び出せば、  
大怪我は免れないだろう。それに、失敗すればまた殴られ  
る。最悪殺されるかもしれない。

そう思うと、動こうという気すら起きなかった。

「あんまり優しくするとツケあがるぞ？」

「い、いや……んぐ、っうゝ」

優しく甘ったるい調子の男に対し、背後の男は冷たく乱暴だった。

背後から匠の顎をがっちりと掴み、口を無理やり割り開いて喉の奥に指を突っ込んでくる。何故そんなことを？なんて考えたのもつかの間、小さなピンク色のタブレットを押し込まれた。

「口開けろ、これを飲み込め」

「うぐ、んんんゝ ～～～～ツ」

「飲まないと殴るぞ？山奥に捨てたっていいんだからな、おらっ！」

「ツ……う、ううゝ つ……つこく、つおええゝ ……ツ」

絶対に飲み込んではいけないのに！わかっていても、脅されれば飲み込まざるを得なく、巧は喉を鳴らし、嘔吐きながらも飲み込んだ。

喉が動いたのを見て、男たちはにたにた笑う。

そのままぱっと前に突き飛ばすように手を離され、無様に  
つんのめる。バンの床は冷たく、無機質で、非日常を感じさ  
せた。

怖い。このまま殺されるんだろうか。恐ろしいがこのまま  
寝転んだままにいるわけにもいかず、身体を起こした、その  
時だった。

「あゝっ……！？♡」

どくんっ♡

心臓が大きく跳ね、視界が不自然にぐにゃりと一瞬歪ん  
だ。全身がちりちり炙られているみたいに熱くなり、呼吸が  
苦しくなって、巧は思わず胸を抑えた。

「なに飲ませたんだ？」

「最近はやりのセックスドラッグ。ぶっ飛べるらしいぞ？し  
かも即効性だ」

「いいね。んじゃおっぱじめますか……♡」

「後で運転代われよ～」

「わかってるって」

巧の頭上で物騒な言葉が飛び交う。セックスドラッグ？  
おっぱじめる？つまり、強盗ではなく、こいつらは巧をレイ  
プするつもりなのだ。

男の自分が同性からそんな悍ましい対象にされるなんて考  
えたことがあるわけもない。

一秒、刻一刻とおかしくなっていく自分の身体を抱きしめ  
ながら、巧はなんとか後ろに下がろうとする。しかし無情に  
も、男たちが巧を床に仰向けに転がし、四肢を押さえつけ、  
絶対に逃がさないと教え込んできた。

ベルトのバックルを抜かれ、ズボンごと下着を抜き去られ  
る。着ていたパーカーとシャツは一人が取り出したナイフで  
無残に前を裂かれ、二度と服としては機能しない末路をた  
どった。

「うおっ、ちんぽ綺麗な色じゃん」

「やっぱ童貞なんだ.....♡」

「っう、あゝ、あえ、さわっ.....んううゝ、っひ!？」

全身を値踏みするようにまじまじと見つめられ、じわりと目じりに涙が溜まった。

恥ずかしい。屈辱だ。こんなのありえない。でも、抵抗できない。

葉のせいかあまり使われた形跡のない色の沈着していないちんぽは兆しかけており、男の一人がそれをぎゅっと無遠慮に握りこんだ。

「びくってなっちゃって、案外いいじゃん」

「んううゝ、みる、なよおっ.....っひ、っうあ、アゝ.....ッ！」

見るな。恐怖の中でもどうしても嫌でたまらなくて、巧は首を横に振りながら必死に訴える。

しかし巧の願いなどどうでもいい男たちはそれをまるっと無視して本格的に好き勝手身体をまさぐり始めた。

「一回イカセとくか♡」

「そのまま突っ込まないのか？」

「流血沙汰はNG。そもそも俺たちはサンドバッグじゃなくて都合のいい肉便器が欲しいんだからな」

ちゅこ、ちゅこ、にゅこっ♡

上下に扱かれると一瞬で硬くはちきれんばかりに勃起してしまう。

嫌でも性感帯を弄られればあっという間に涎を垂らし始めるのは、男である以上仕方ないことなのか。

口惜しさと、普段の自慰とは全く違う下半身が蕩けそうな快感に齒を食いしばりながら、巧は男たちに向かってとぎれとぎれになりながらも言葉を口にする。

「お、男だぞ、俺はっ……お、女じゃないっ、っあうう♡」

「いい声出せるじゃん。あと、男をメス堕ちさせるのがだいご味ってもんだろ？うんち穴でちんぽずっぽり咥えこんであひあひ喘ぐ、どうしようもなくみっともない肉人形がそそるんだよ♡」

男なのに、どうして！その疑問に対し、男たちは口角を吊り上げながら持論を展開した。

当然巧は一ミリも彼らの言葉に共感できない。……が、身体を蝕む熱はどんどん勝手に際限なく高まってくる。

全身が痺れ、力が入らなくなってくる。だというのに、神経は剥き出しになったかのようによりいっそう鋭く敏感になっていった。

己の手による自慰しか経験のない巧は男のごつごつとした手に扱かれ、あっという間に限界を迎えてしまった。

鈴口をぐりぐり爪の先で抉られるのが気持ちいい。裏筋も、亀頭も、陰囊も、どこもかしこも緩急をつけて扱かれればたまったものではない。

「っおあ♡あひ、っいっぎ♡んんう、でちゃ、っあ、っあゝ  
♡♡♡」

「はっや♡いやー、巧君が遅漏じゃなくてよかったよ。ん  
じゃおら！男の手で、レイプされながらイけっ！」

「っおほおおおゝ ～～～～ッッッ♡♡♡」

ぐち、ぐちゅちゅっ♡ちゅこ、ちゅこ、びゅるるるる  
るうううっ♡♡♡

男たちは手慣れていた。巧以外にもきっと、たくさんの被害者がいるのだろう。

そう確信できるくらいには、男の手コキは手慣れていて、最高に気持ちよかった。

あっという間に白濁を吐きだした巧は、ぼろぼろ涙を零しながらぐったりと全身を弛緩させた。頭が真っ白になって視界にぱちぱち火花が散る。余韻も全然抜けなくて、時折腰をびくっ♡びくんっ♡と痙攣しているかのように跳ねさせた。

「いい顔してんな〜♡でもこんなのまだ序の口だから」

背後をとった男が弛緩しきった巧を引きずり、身体を起こさせ脇に手を入れ支える形になる。そのまま足を無理やりM字に開かされ、ザーメンでどろどろに汚れたちんぽや全く使われた形跡のない、慎ましやかなアナルが露わになった。

それと同時に、他の男が大容量の新品のローションボトルやバイブなど、アダルトグッズの数々を袋から取り出してわざとらしく巧の視界に入るよう、傍に並べてみせる。

「ひっ……！？」

「なんだよ、大人の玩具くらい見たことあるだろ？なに怯えてるんだよ、そんなかーわいい顔してたらもっと虐めくなっちゃうだろ♡」

「あ、っああゝ……！♡っあく、ひっ……」

思わず喉の奥から引き攣った呻きを漏らすと、男たちはけたけた笑いながらじっとりと別のこもった、いやらしい目で巧を見つめてくる。

否、見つめるだけではない。正面に陣取る男の一人がローションボトルを手にとって蓋をあけ、たっぷりと下半身にまぶしてきた。

白濁とした精液と無色透明なローションが混ざり合い、とろりと床に垂れ落ちる。

「つめ、ったあゝ .....っうあ、は、やだ、ぬるぬるっ、っひ、っあゝ♡」

「ついでにリング嵌めちゃお♡勃起したらつけられないし♡」

「いいね、みじめでみっともなくて最高～」

ついでと言わんばかりに、横にいた男が鈍く輝く金属のリングを手早く出したばかりで兆しかけの肉棒の根本にハメてしまう。

股間に圧迫感と違和感を感じ、思わず眉根を寄せ、涙をまたぼろりと一粒零した。だが、萎えることはなく、むしろそれを刺激として膨らんでしまう。

当然勃起すれば痛みと圧迫感を与えてくるわけで、巧は眉根を寄せて

「な、なんだよお……！外せよおっ……！」

「だーめ♡ほら、うつぶせになってね」

「う、っうひ、っぁゝしり、つめっ……うゝ うゝ うゝ う～～  
～～っ♡」

「嫌がってもおっ勃たせてちゃ説得力ないですよお～♡」

訴えはスルーされ、フライパンでパンケーキをひっくり返すかのようにうつぶせにされ、尻だけを高くあげさせられる。

背中側にいた男が正面にくる形になり、無理やり抱き着かされてしまい、気持ち悪くて、嫌で嫌でたまらなかった。

しかし、男の指摘した通り、こんな状況でも巧の雄ははちきれんばかりに膨らんだまま萎えることがない。それどころか、触れたくて触れたくてたまらない。

ちんぽの先からはひっきりなしに涎が垂れていて、あまりにもはしたなくだらしない。

正面と側面に陣取る男はペットボトルの水で補給しつつ、その様子をにたにた笑いながら見つめていた。

「んじゃ俺の最高の手マンを披露してやろうかね」

そう口にして、男は人差し指を巧の尻穴に挿入してくる。

恐ろしいほど痛みも圧迫感もない。それどころか肉壁を軽く擦られただけでばちばちと、視界に火花が散るほどの強烈な快感が溢れてきた。

「っお、あええゝ！？ん、っう、あゝ、そこ、きたな、尻っいゝ……！」

「なあに言ってるんだ、ここは今からケツマンコになるんだよっ！ここじゃなきゃイケない身体にしてやるからなっ！」

ぐち、にちちっ、ぬぷんっ♡ぐち、ぐちゅっ♡

指が激しく尻穴で蠢きまわる。第二関節で曲げ、押し広げてくる指はまるで生き物かなにかのようだった。

しかも、最悪なのは指が動くたびにそれだけで昇天しそうなほどの強烈な快感を得てしまうことだ。

「っんひ♡っう、くあ、なに、こりえっ.....♡ふーっ、ふぐうっ♡おれ、おかし、こんな、っあゝ.....♡」

「才能あるよ、巧く〜ん、たっぷりほぐすからね♡」

ぬちぬちっ♡くぶ、くぷぷぶ.....くち、くちんっ♡ぐじゅ、ぬぷぷっ♡♡♡

「口も弄ってやるか♡あとでたっぷりフェラしてもらうから、ロン中も気持ちよくなれないとな♡」

「んぶうううゝっ♡ふぎゅっ、やめ、んひっ♡れろ、くちゅっ、んじゅる、っうあゝ、アゝ.....っ♡♡♡」

「んじゃ俺は乳首弄るか.....♡」

「ひぎっ！？んちゅ、っう、そんな、ひよほおっ.....っおほ♡んぎ、っい、っううううゝ、んう、つくふ♡」

暇な二人も参戦し、アナルだけでなく乳首や口まで攻め立てられ始めた。

乳首をぎゅううう～っ♡と抓られたり、口の中に指を突っ込まれて引っ張られたり、好き勝手暴れる男たちはまるっきり巧のペースなど考えず、ただただ気のおかしくなるような途方もない快感を休みなく与え続ける。

太ももががくがく震え、下腹部が引きつる。気づけば指は三本に増えていた。腹の浅い部分にあるしこりははじめは目立たなかったのに、目ざとく見つけた男の指が何度も何度も抉ってくるせいで、ぷっくりとうまそうに膨らみつつあった。

「あっあっあっ.....♡ふぐ、むぐ、っうううウゝ うう～～～  
～ッッッ♡♡♡」

巧は黒髪を振りたくり、拳を握りしめ、歯を食いしばり  
.....とにかくできることを必死に行いながら、必死に快感か  
ら逃れようとする。

聞くに堪えない甘ったるい声も、快感に蕩けた顔も、こん  
などこの馬の骨とも知れない犯罪者たちに届いてほしくな  
い。そんなささやかな抵抗だった。イきたい。射精したい。  
そんな煩悩を必死に押さえ込みながらの抵抗だった。

しかし、それが男たちをよりいっそう煽ることを、巧は理  
解していなかった。

「あゝ～♡最高っ、声とか我慢しちゃってるわけ？」

「ちんぽリングハメられて射精もできないのに♡俺たちのさ  
じ加減でずーっと放置とかもできちゃうんだよ？」

「やだ、やだやだやだっあっ！」

気づいた男たちがはやし立ててくる。

上ずった高めの声でけたけたやかましく笑いながら、攻める手は止めない。愉快で愉快で仕方がないのだ。

それでも首を横に振って嫌がる巧を見て、アナルを広げていた男が口を開き、アナルをほぐす手とは反対の手を高く掲げた。

「いい加減受け入れろっ！」

「うぎっ！？」

ばしんっ！

乾いた音が車内に響く。一瞬遅れて尻にじんじんとした熱と痛みが発生し、そこでようやく尻を叩かれたことに気づいた。

痛い。痛いだけのはずなのに、響く痛みと熱がなぜか快感を伴っている。

「あぎっ！？や、いた、っいいッ！？♡」

「痛いって言いつつ悦んでるだろうが、淫乱っ！犯されるために生まれてきたんだなあ！認めろよっ！」

「っおぐ、つい、ぎいゝ .....っあゝ♡んう、ろお、してっ、おれ、おかし、ついゝ♡んぐ、ぢゆるるっ♡」

ばしん、ばしんっ、ばしんっっ！

男は器用に手マンを続けながら尻を叩いてくる。その間も口や乳首わき腹、ありとあらゆるところをまさぐられ続けた。

気持ちいいのに苦しい。感じたくないのに、叩かれるたびに脳みそが揺れるほど気持ちいい。

「さて、そろそろトロマンも完成っ♡」

しばらく叩かれ撻られた後、男はようやく手を止め、指をアナルから引き抜いた。一気にいいところをがりっ指先で引っかかれ、背中が反り返る。

そのまま頬を硬いバンの床にこすりつけ、ぼろぼろ涙を零す。口惜しさと恐怖、そして.....快樂由来の涙だった。

「っあ、あええゝ .....ふっ♡っふ〜〜〜っ♡♡♡う、ううゝ  
.....っ」

「泣いちゃってか〜わいい♡無様だねえ、情けないねえ  
.....♡」

「準備できたんならさっさと突っ込もうぜ」

「リング、とってえ.....」

「まだだ〜め。もっと従順な肉便器、ちんぼケースにならないと外してあげないぞお」

指を抜いたアナルは質量を求めてくぱっ♡くぱっ♡と勝手に収縮を繰り返していた。

嫌がっていても身体は正直とはよく言ったもので、巧の身体は薬と愛撫、そして射精をせき止められている苦痛から、全身を赤く染め上げ、しっとり汗をかいて、身をよじっている。

ローションが穴からとろりと垂れ、伝い落ちて床に染みを作る。まさに食べごろといった様子に、男たちはごくりと唾を飲み込んだ。

「俺がほぐしたんだし一番はもらうぞ」

「へいへい。一回出したら代われよ」

「わーってるって。きちんと平等に、だろ。それに口と手も使えばいいじゃん」

「運転席のことも忘れんなよ！」

男たちがげらげら笑って、それぞれ前を寛げる。

前に、後ろに、側面にそれぞれ陣取って、巧を無理やり完全な四つん這いの体勢に変えた。

巧の身体は手を完全に離してしまえばすぐにその場に倒れ込みそうなほど、枯れ枝みたいに心もとない。すべては前身に蔓延する薬と快楽のせいであった。が、男たちはそれをあざ笑い、見下し、侮辱するための材料にしてしまうのだ。

「あ〜いいね、勝手に吸い付いてくる。処女マン気持ちよさ  
そうだな〜♡」

アナルの縁にあてがわれたのは極太の硬いおちんぽで、  
でっぴりと太った亀頭を巧の秘孔は歓待し、少し力を入れた  
だけで簡単にめりこんでいく。

その熱と圧倒的な質量に巧は怯える。尻の穴は排泄器官  
で、入れるためのものではないのだ。

裂けるのも怖い、ここで快楽を得てしまうという確信が  
あった。それがなにより恐ろしい。だって、人間として大切  
な何かを失ってしまう。

「っひ……！やだ、やだ……たすけ、やめろ、やだ、こんな  
の、っう、っあ、んむぐっ！？」

拒否しようと駄々をこねた瞬間、口の中に巧のものよりも  
一回り以上大きく長い、立派ないちもつが突っ込まれた。